

序

今年の実習発掘は惨めであった。女子が次々に熱を出してはひっくりかえるのである。医師が気色ばんで、これ以上この状態が続くなら計画の中止を要求する、といきまき始めた。私が、学生を死に働きに働かせて何かを得ようとしている狡猾な教師に見えたらしい。しかし調査中の生活条件は、実は近年に稀なほどよかったのである。屈辱の想いもさることながら、女子自らが健康管理の能力を失くしている実態に驚ろき、文化そのものが崩壊しつつあるに違いないという恐怖にとりつかれ、あの炎天の太陽が蒼黒く見えてしまった。第5図を見て欲しい。田の字仕切りのひとつを放棄し、住居址を嚙り掘りしたまま尻尾を巻いたのだ。私の世代の言葉で言えば、敵前逃亡に等しいではないか！

室内の実習も野外に劣らぬ劣悪な展開ぶりだった。前年度の報告書が今年の秋にやっとできあがった為体を見ているので、やおら発奮して仕事の先取りを試みたのはけなげだが、結局は前回の轍の跡に日を追って嵌り込んで行った。年に2回の実習発掘をこなし、みんなきっちり一人前になって卒業して行った数年前までのことが夢のようである。もう学外実習を止めようか…。白木原と甲元と、何度も顔を見合せた。

強権を発動して仕上げに持ち込んだが、原稿の殆んどは一夜づけで、時間に急かれて添削せぬまま載せたのもある。日が経てば自分の文の値うちの判る時も来るし、その時の発奮の材料になれば、全く無益というわけでもあるまい。これをお読み下さる方々は、上記のいきさつをお含み下さり、機会があれば学生たちをお励まし下さるようお願いします。

さて、思わず悩乱の態をお見せしてしまったが、たったこれだけのものができるについても、実に多くの方々のお世話になった。遺跡を煙滅から守り、調査中も炎天に立ってお励まし下さった矢野幸男氏や兼久郷土史研究会の方々、遺物を蒐集して資料の散失を防いで下さった向井一雄氏等をはじめ、様々な御援助を給わった地域の方々に御礼申しあげたい。またその動きを諒とされ、調査隊の受入れを御承知下さった天城町長・教育長・社教課長、調査に伴う一切の事を担いで下さった吉岡武美氏とその同僚の方々、学生の看病に亀津の町まで走って下さった社教課長夫人、石材・植物について御指導下さった高橋俊正・大迫靖雄の両先生等々、御礼の言葉を探しにくい。この次には何とかして御首肯いただける程度の実習発掘を実施して、御厚情に報いたいものである。

1989年3月10日

白木原 和美

例 言

○本書は熊本大学文学部考古学研究室による鹿児島県大島郡天城町大字兼久字鍋窪1788～1793・1817番地および字塔原1177番地所在の塔原遺跡の発掘調査概要である。

○発掘調査は1988年7月9日より、7月19日まで計10日間にわたって行なわれた。

○本書の編集は友口・岩崎が行ない、執筆者は各文末に記した。

調査参加者は以下の通りである。

白木原和美 甲元眞之 友口恵子

岩崎充宏（大学院1年次生）

上田隆史 福本信子 森久直 山下志保（以上4年次生）

大久保謙一郎 岡本睦子 光永美栄 笠由美子 菊原潤一（以上3年次生）

川瀬雄一 坂本純子 秦憲二 新谷晶子 中嶋浩彰 松村真紀子 村上智恵子

森由紀子 横山哲英 渡辺弘美（以上2年次生）

なお、整理作業については藤崎周太郎（大学院2年次生）の協力を得た。

本文目次

序	1
一、調査の目的と経過	3
二、遺跡の位置と環境	4
三、調査の概要	11
(1) 層序	11
(2) 遺構	11
(3) 遺物	18
1) 出土品	18
2) 採集品	24
四、まとめ	28